

## 特集：遠隔でつながる

# コロナ禍における鶴見大学および図書館の取り組み

牧 幸男

## はじめに

新型コロナウイルス禍の影響により、ここ数か月の短い期間であらゆる組織における「仕事の在り方」が急速に変化しました。

感染拡大防止対策の観点から、様々な事柄がオンラインに切り替わり、今までの常識が大きく変化中、大学においても「入学式」や「オープンキャンパス」が中止になり、「在宅勤務」「遠隔授業」「オンライン会議」の実施など、新たな対応に追われることとなりました。

そのような状況下、教育研究機関の中核であり、アクティブラーニングの拠点である「場所としての図書館」は、自らが、その基本的な機能を見直し、大きく変化させる必要に迫られました。

## 8月の神奈川県

この原稿のご依頼を頂戴いたしました8月上旬は、日本全国でコロナ感染者数が連日最高値を更新していて、本学が所在する神奈川県は、感染者数では東京都に次ぎ全国ワースト2でありました。感染拡大が叫ばれる一方、経済活動は復活に向けて動き出すという混沌とした状況にあり、丁度全国各地で、大学運動部でのクラスター発生が、相次いで報道され始めたころでありました。

本学でも教職員の在宅勤務が解かれ、お盆休み返上で対面による集中講義が実施され、学生教職員共に、授業再開に向け動き始めていました。

## 鶴見大学・鶴見大学短期大学部について

本学園は曹洞宗の大本山である總持寺を開祖と

しており、JR京浜東北線で横浜駅から三つ目の鶴見駅が最寄り駅で、更に二つ先は東京都という両者の接点に位置しており、広大な境内の中に大学の校舎が点在する、総学生数が2,900人程度の小規模な大学です。

図書館は蔵書数が85万冊ほどで、事務室の人員構成といたしましては、館長（文学部教授）、正規職員10名、臨時職員4名、夜間のみカウンター業務2名を外部委託という状況であります。

## 学部構成ゆえのハイブリット型授業展開

本学の特質といたしまして、歯学部と文学部（日本文学科、英語英米文学科、文化財学科、ドキュメンテーション学科）、短期大学部（保育科・歯科衛生科）という、異なった分野の学部構成で、実習を伴う講義も数多くあることから、コロナ禍での対応として、全学を通じた統一の感染対策を定めるのではなく、授業の実施方法などは各学部にて委ねられました。

入構禁止期間や対面授業と遠隔授業の期間も異なるという状況で、また、基本的に教職員の利用は継続するという方針でありましたので、多くの大学がキャンパスを封鎖し図書館を閉館する中、学生の入館制限を実施したのは2か月程度で、図書館を完全閉館することはありませんでした。

交代で在宅勤務をしながら、教職員を対象に来館者対応を継続し、同時に学生を対象に新たな非来館型サービスを展開することは、折しも図書館リニューアル工事の真っ最中ということも重なり、非常に困難なものでした。

学部ごとに入構制限期間が異なるという本学独